

2021 年度 関西学院中学部 学校評価を終えて

幼稚園から大学院まで連なる総合学園としての関西学院は、その良さを生かし、お互いに連携をとりながら整合性のとれた学校評価を実施するため、接続する学校の教職員から専門的な視点による意見をうかがうことで、第三者評価と学校関係者評価の両方の性格を併せ持つ「第三者評価／学校関係者評価」を導入しています。この度、中学部の学校評価が学院総合企画会議（短大・各学校内部質保証部会）において承認されましたので、ウェブサイト上で公表させていただきます。

本年度も、経年変化を見るために、引き続き「教育課程・学習指導」、「生徒指導」、「保健管理」、「保護者との連携」、「キリスト教主義教育の実践」、「特色ある教育の実践」「関西学院共通項目」、「その他（コロナ禍への対応）」を評価項目に設定しました。評価の実施にあたっては、各項目について生徒・保護者・教員にアンケート調査を行い、それぞれの立場からの意見を集めることによって客観性を確保しました。アンケートの回収率は、生徒 97.3%、保護者 70.6%、教員 100%となっております。

経年的には概ね高い評価を維持していますが、強い肯定評価（強くそう思う）を昨年度のそれと比較すると、コロナ禍の2年目ならば改善できたであろう余地が見てとれる部面があります。時代や状況を超えて「変えてはならないものを変えない」姿勢を堅持するとともに、それらに即して「変えるべきものを変える」柔軟性が一層求められていることを認識させられたアンケート結果でした。

本年度も各項目について、まず現状を説明し、アンケートの集計結果を参考にしながら評価・分析を加え、今後の改善に向けた方策を示し、自己点検・評価としました。また、上記のように、接続する学校の教職員からの意見も合わせて中学部の学校評価としてまとめています。

関西学院中学部は、学校評価を通じて自らその課題を探り、それに向き合って改善することによって、より充実した教育活動等を生徒に提供し、また、その結果を社会に公表することによって信頼を高め、課題意識を共有していく所存であります。

2021 年度中学部の学校評価を項目別にまとめたものを、以下に掲載いたします。

今後とも、各部門において改善に努めていく所存ですので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

2022 年 3 月 18 日
関西学院中学部
部長 藤原康洋

学校評価

教育理念・使命・目標

中学部がめざす教育の目標

1. キリスト教に基づいた伝統ある人間教育を根本に置いて、「感謝・祈り・練達」の教育理念を大切に、人の痛みをわかろうとする人間、他者を尊重し将来に夢を持って社会に貢献できる人間を育てる。
2. 建学の精神を体得した生徒を育てることにより、将来、高等部、大学、さらに社会人として、リーダー的役割を果たせる人間を育てる。

2021 年度の評価項目

- ①教育課程・学習指導：全生徒に対して中学部がめざす水準の基礎学力を定着させるとともに、学力上位生徒に対して、興味関心に応じた発展的学習を行うため、学習課程の精査や教授力の向上をめざして設定している。
 - ②生徒指導：生徒の社会的資質や行動力を高め、学校が生徒にとって有意義で興味深く充実したものになることをめざして設定している。
 - ③保健管理：生徒の身体面、精神面にかかわる項目として設定している。
 - ④保護者との連携：生徒を育てるには学校教育と家庭教育に一貫性が必要である。そのため保護者と教員の連携が密になるように設定している。
 - ⑤キリスト教主義教育の実践：建学の精神としてのキリスト教主義教育の充実をめざし設定している。
 - ⑥特色ある教育の実践：中学部の特色として重点的に展開している授業や行事等の充実をめざし設定している。
 - ⑦関西学院共通項目：スクールモットー“Mastery for Service”を体現する世界市民の育成をめざし設定している。
 - ⑧その他：コロナ禍の中で、学校が適切な対応がとれることをめざし設定している。
- 以上の8項目。

2021 年度の評価項目とテーマ、自己評価、目標、具体的な取組の状況とその効果に対する評価、今後の方策

評価項目 【テーマ】	教育課程・学習指導 【教育課程についての共通理解と連携】	自己評価	A
目標	教員による教育課程の全体像の理解		
具体的な取組の 状況とその効果 に対する評価	●毎年、学習ガイドブックを作成し、生徒に対する教科学習へのガイダンスを行っているが、同時に教員も、そこから各教科の概要を把握・理解できるように期待をしている。 ●学力推移調査等の外部試験の結果を全教員に開示することによって、客観的な学習到達状況を周知している。 ●非常勤講師も含め、教科担当者会議を行い、個別生徒の学習状況について情報交換を行っている。また、隔週の教員会議でも適宜、情報交換を行っている。 ●教員アンケート問1「教員は、教育課程の全体を理解している。」の項目についての肯定的評価が、今年度は82.4%で昨年度は88.2%と高い値を維持している。		
今後の方策	●本項目については、従前の取組を継続的に行うとともに、それが実効的に働くよう、研修的な取組も行う。 ●次年度は1年生と2年生がBYODを実施するので、教科横断的な取組や、各教		

	科の目標・学習活動などについての情報交換を行う。
--	--------------------------

評価項目 【テーマ】	教育課程・学習指導 【生徒の学力・体力の的確な把握】	自己評価	A
目標	外部テスト導入などを通じた学力のより客観的な把握／教員による学力や体力評価についての理解向上		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	●従来通り、定期試験だけでなく、小試験、口頭試問、課題提出、日々の学習活動への意欲等を含め、細やかな学力評価を行っている。 ●外部試験としては学力推移調査を行い客観的な学力把握に努めている。 ●日本漢字能力検定、実用英語技能検定を受検し、生徒らが意欲的に学力向上と学力把握に努めるよう、表彰等を行って、それらを奨励している。 ●外部試験などの結果を返す際、問題の解説にとどまらず、評価数値の持つ意味なども適宜、生徒に説明している。 ●生徒アンケート問6「中学部は、自分の学力や体力を正しくつかんでくれている。」の項目について昨年度同様、80.8%（昨年度 80.8%）の生徒が肯定的評価をしている。 ●同旨の質問である保護者アンケート問7「中学部は、生徒の学力や体力を適正に評価している。」でも昨年度同様、87.9%（昨年度 90.8%）の肯定的評価が得られている。 ●教員アンケート問2「教員は、外部テスト導入などにより、客観的な学力把握に努めている。」の項目について、肯定的評価が昨年度は 76.4%、今年度は 73.5%と、これもほぼ同様であった。		
今後の方策	●概ね、良好な結果が得られているので、従来の取組を継続的に行う。		

評価項目 【テーマ】	教育課程・学習指導 【各教科の特性に応じた授業の工夫】	自己評価	A
目標	教員自身による担当教科の特性の理解／より質の高い授業を目指すための教員による不断の研究／授業研究の成果を活かした授業への不断の創意工夫		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	●従来通り、全教員に対して研修日を設定し、また個人及び教科研究費を支給し、研鑽の機会を確保している。 ●各教科で独自教材を活用し、基礎学力の定着をはかっている。 ●生徒アンケート問8「授業は、さまざまな工夫が加えられていて分かりやすい。」について今年度は 83.7%の肯定的評価が得られており、昨年度の 82.2%から微増であるが、この傾向は数年来変わっていない。 ●教員アンケート問3「教員は、自らが担当する教科の特性を理解している。」についての今年度の肯定的評価は、94.1%であった。昨年度は 97.0%であり、この傾向は数年来変わっていない。 ●教員アンケート問4「教員は、質の高い授業を目指して、授業研究を不断に行っている。」に対する肯定的評価は 82.3%（昨年度 85.3%）、教員アンケート問5「教員は、授業研究の成果を活かし、授業の創意工夫を行っている。」に対する肯定的評価は 76.5%（昨年度 85.3%）と高い値を維持しているが、少し低下している。 ●教員アンケート問5「教員は、授業研究の成果を活かし、授業の創意工夫を行っている。」に対する教員の肯定的評価が若干減少しているのは気がかりである。これは、教員が日々、授業以外で生徒対応、学級経営や課外活動への対応に追わ		

	れていることが原因と考えられる。 ●教員アンケート問6「教員は、知的好奇心の喚起に留意した授業を行っている。」に対する肯定的評価が76.4%であるが、生徒アンケート問8「授業は、さまざまな工夫が加えられていて分かりやすい。」に対する肯定的評価は83.7%と、生徒の授業への評価は高い。
今後の方策	●働き方改革を含め、各教員が自己研鑽を行えるような環境の整備を行う。

評価項目 【テーマ】	教育課程・学習指導 【個々のニーズや興味関心に応じた授業展開】	自己評価	B
目標	知的好奇心の喚起に留意した授業の展開／補習など特別な学習機会の提供／中学部と高等部との連携		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	●英語は従来より分割授業を行ってきたが、数学でも分割授業を一部導入し、授業内で個別生徒に対応できる機会を増やしている。 ●授業では、各教科、発展的、応用的内容を扱うよう努めている。 ●数学、英語では到達度の低い生徒に対し、補習を行っている。他教科においても個別的に遅れの目立つ生徒には、課題を課す等の対応を行っている。 ●生徒アンケート問9、保護者アンケート問8の、補習等の機会が確保されているかについての項目では、生徒の肯定的評価が82.8%（昨年度84.2%）で、保護者の肯定的評価が61.5%（昨年度65.0%）である。新型コロナウイルス感染症の流行により、大学生による夏季学習会が開催できなかったことなどが影響していると考えられる。		
今後の方策	●英語や数学に関しては、現在の分割授業を継続し、できる限り生徒の必要性に合わせた授業構築を行う。 ●生徒間の学力差が大きく、授業内容、進度の焦点を合わせにくくなっているのが現状である。到達度の低い生徒への対応を継続するとともに、学力が高く学習意欲も旺盛な生徒の要求にも、きめ細かく対応できるよう、少人数制授業の幅広い導入を検討する。ただし、これの実現に向けた人的・財政的担保は必要である。 ●高等部で先行して実施されている、大学生による定期的な補習制度を、中学部でも導入を検討している。早期の実現を目指す。		

評価項目 【テーマ】	教育課程・学習指導 【課外活動の充実】	自己評価	A+
目標	生徒会などの自治活動の充実／クラブ活動など課外活動の充実／課外活動が正課（学習）を妨げていないことの徹底		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	●生徒の多くが、クラブ活動などの課外活動へ意欲的に参加している。また、受験希望者対象の学校説明会などでも、アンケートや個別質問で課外活動への関心の高さがうかがわれる。 ●コロナ禍で試合の機会が少ない中でも、ダンス部、タッチフットボール部、陸上競技部、水泳部、英語部（第44回全国ジュニア英語スピーチコンテスト）、理科部（第21回創造アイデアロボットコンテスト全国中学生大会）が全国大会に出場するなど活躍している。 ●生徒会活動全般を通じ、自治意識の涵養につとめている。 ●課外活動と学習の両立を図るため、従来どおり、定期試験前1週間はクラブ活動停止としている。 ●学習や家庭・地域での体験ができるよう、休暇中のクラブ活動日を、夏期休暇中		

	は18日に制限し、冬期休暇中は停止しているのは従来通りであるが、今年度から文部科学省の部活動ガイドラインを遵守している。 ●一部のクラブ活動（7つのクラブ活動）で部活動指導員を導入し、より専門的な指導を行っている。 ●生徒アンケート問4「学校に行くのが楽しい。」の肯定的評価が87.3%で、生徒アンケート問5「中学部の教育に満足している。」の肯定的評価が85.3%である。保護者アンケート問4「生徒は楽しんで学校に通っている。」の肯定的評価が93.5%で、保護者アンケート問5「中学部の教育に満足している。」の肯定的評価が85.2%である。これは正課外の活動への期待、評価も高いことを示していると考えられる。
今後の方策	●ここ数年来、アンケートでは概ね良好な評価が得られているので、従来通りの取組を継続していく。

評価項目 【テーマ】	生徒指導 【基本的生活習慣の確立】	自己評価	B
目標	挨拶や時間厳守などの基本的社会マナーの指導／整理整頓や環境美化の指導		
具体的な取組の 状況とその効果 に対する評価	●挨拶、時間厳守、身だしなみ等の基本的社会マナーについては、生徒指導部を中心に全教員で重点的に指導している。 ●整理整頓や環境美化については、風紀美化担当教員と風紀美化委員会が中心となり、教室の掃除や廊下の汚れを取るなど校内美化に努めている。 ●生徒アンケート問13、保護者アンケート問13、教員アンケート問12の基本的社会マナーについての項目では、生徒の肯定的評価が89.5%、保護者の肯定的評価が87.0%と概ね高い評価を得られているのに対して、教員の肯定的評価は67.6%と例年に比べて低くなっている。コロナ禍で生徒たちにかかるストレスが高く、ルールやマナーに対しての指導が増えたことが原因と考えられる。 ●肯定的評価が低く課題となっている教員アンケート問13「中学部は、生徒に整理整頓や環境美化に努めさせている。」の項目については、2018年度は57.5%、2019年度は66.7%と上がってきていたが、昨年度は55.8%、今年度は53.0%とやや低くなった。今年度もまた新型コロナウイルス感染予防のため掃除を簡略化し各教室のゴミ箱設置をやめるなどの措置を講じた期間があったために、具体的指導ができなかったことが原因だと考えられる。		
今後の方策	●基本的社会マナーについては、カウンセリング委員会と連携し生徒たちの精神的ストレス軽減に努め、個々の指導に丁寧に対応していくこととする。 ●整理整頓や環境美化の指導については、新型コロナウイルスの感染状況を見ながら、できるだけ通常の状態に戻しつつ、風紀美化委員会を中心に美化意識の向上を促していくこととする。		

評価項目 【テーマ】	生徒指導 【自主自律の精神の育成】	自己評価	B
目標	HR（学級活動）における自主自律の精神の育成／学校行事における班活動などを通じた自主自律の精神の育成		
具体的な取組の 状況とその効果 に対する評価	●各行事において、生徒会役員がリーダーとなり委員会を組織して、その企画・運営を自主的に行っている。 ●代議員会および各委員会活動の活性化に重点を置き、生徒会活動およびホームルーム活動を中心に自主自律の精神を育てている。		

	●今年度も昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染拡大により各行事の中止や規模縮小を余儀なくされた。 ●生徒アンケート問 10「自分たちの手でホームルームや生徒会などの自治活動を行っている。」に対する肯定的評価が 69.6%と昨年度の 66.2%よりもやや高くなっているが、一昨年度の 75.9%と比べるとまだ 6.3 ポイント低くなっている。また教員アンケート問 14「クラス担任は、学級活動において生徒の自主自律の精神の育成に努めている。」に対する肯定的評価が 73.5%とやや低くなっている。これは今年度も各行事の中止や規模縮小を余儀なくされ思うように生徒会活動ができなかったためと考えられる。一方で保護者アンケート問 14「中学部は、生徒の自主自律の精神を育成している。」に対する肯定的評価は 84.9%と高く、教員アンケート問 9「中学部は、生徒会などの自治活動が生徒によって盛んに行われるように配慮している。」に対する肯定的評価も 85.3%と高い評価となった。これはコロナ禍の制約の中で、生徒会役員を中心に生徒たちが工夫を凝らし行事などに取り組んできた姿が評価されたものと考えられる。
今後の方策	●新型コロナウイルス感染予防や新しい生活様式を考慮しながら、各行事の在り方を模索し、その企画・運営を生徒が自主的に行うことができるように指導する中で、生徒の自主自律の精神を育成していく。 ●新型コロナウイルス感染予防や新しい生活様式を考慮しながら、生徒会活動や委員会活動を活性化し、生徒に自ら判断し行動できる力を身につけさせる。 ●生徒会を担当する教員と学年担任団との連携を深め、生徒会活動の継続性を高めながら活性化を図っていく。

評価項目 【テーマ】	生徒指導 【問題行動への対応】	自己評価	A
目標	生徒の問題への対応についての教員間での共通理解／生徒の問題行動の早期発見／問題行動に対しての適切な指導・訓戒		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	●生徒の問題行動に対しては、「迅速・適切・誠実」を念頭におき、当該学年団と生徒指導部が密に連携しながら対応をしている。 ●生徒の問題への対応についての教員間での共通理解については、生徒指導部内に情報共有フォルダーを作成し指導案件の報告をきめ細かに行ってきた。さらに、基本的共通理解のための教員用マニュアルを用いて共通理解と意思統一を進めている。 ●生徒アンケート問 14、保護者アンケート問 15、教員アンケート問 16 の、生徒の行動に問題があれば適切に対応しているかについての項目では、生徒・保護者・教員ともに肯定的評価はおおむね良い。これは生徒の問題行動に対して「迅速・適切・誠実」を念頭におき、当該学年団と生徒指導部が密に連携しながら対応をし、生徒指導に関する情報共有と意思統一に取り組んだ成果が表れたものと考えられる。 ●長年課題であった教員アンケート問 15「生徒の問題への対応について教員間で共通理解がある。」の項目については肯定的評価が一昨年度の 69.7%から昨年度と今年度ともに 73.5%とやや上がってきた。まだ不十分であるが、情報共有フォルダーの積極的活用を促した効果があったと考えられる。		
今後の方策	●生徒の問題行動に対しては、保護者と担任やクラブ顧問の連携を促し、当該学年団と生徒指導部が密に連携し、きめ細かく指導していく。 ●基本的共通理解のための教員用マニュアルおよび情報共有フォルダーの活用の徹底をさらに進める。		

評価項目 【テーマ】	保健管理 【心身の健康管理】	自己評価	A
目標	健康診断の定期的な実施と事後措置／健康状態の把握／健康相談／感染症の予防		
具体的な取組の 状況とその効果 に対する評価	● 2月に新入生健康診断を実施、全校定期健康診断を5月に実施した。新入生健康診断・定期健康診断の受診率は99.3%だった。 ● 体育や部活動が盛んな本校の特性から、校内での心臓突然死を防ぐために、特に心臓検診には力を入れており、心電図検査を毎年全学年に実施している。事後措置は個々の生徒の保健調査、日々の様子を基に学校医が再判定を行い、心臓検診の質の向上に努めている。その結果、教員アンケート問17「中学部は、生徒に対し健康診断を定期的な実施し、事後措置を適切に行っている。」の項目についての肯定的評価は100%だった。 ● 心理的な課題を抱える生徒支援について、週1回サポートルーム会議を実施している。学年主任、支援コーディネーター、支援員、養護教諭、カウンセラーで情報共有を行っている。今年度は外部講師を招き事例研究会を実施、生徒の見立て、支援について教員研修を行った。 ● 生徒アンケート問15、保護者アンケート問16、教員アンケート問18の、生徒の健康について適切に把握しているかについての項目で、生徒の81.0%、保護者の87.8%、教員の94.1%から肯定的評価を受けた。 ● 今年度も新型コロナウイルス感染症への対策に力を入れて取り組んだ。学校医指導のもと関西学院危機管理対策本部、関西学院保健館、初等部、高等部とも連携をとり、感染症対策に取り組みながら教育活動を行ってきた。その結果、保護者アンケート問17「中学部は、生徒が健康で安全な学校生活が送れるよう感染症の予防に配慮している。」の項目について、94.3%の肯定的評価を受けた。		
今後の方策	● 今後も新型コロナウイルス感染症拡大防止のため関係各所と連携を取りながら、最善の対応が取れるよう努力していきたい。 ● 心理的な課題を抱える生徒については、困難なケースが見受けられる。外部機関とも連携を取りながら生徒を支援していきたい。		

評価項目 【テーマ】	保健管理 【怪我・急病発生時の対応】	自己評価	A
目標	怪我・急病発生時の迅速で適切な対応		
具体的な取組の 状況とその効果 に対する評価	● 平均来室者数は、内科的理由が70.2件/月、外科的理由が64.1件/月である。(2021年12月末現在) ● 日常の疾病、怪我については迅速に、適切に処置できるよう努めている。 ● 病状報告とその対応については、保護者と連携、相談しながら行っている。 ● 学校生活の中で配慮が必要となる生徒の病状とその対応については、教員間で情報を共有している。 ● 生徒アンケート問17、保護者アンケート問18、教員アンケート問20の、怪我・急病発生時の対応についての項目では、昨年度と同様に生徒の87.5%、保護者の94.4%、教員の100%から肯定的評価を受けている。		
今後の方策	● 今後も怪我・急病発生時の対応、疾病予防については、迅速かつ適切に対応できるよう取り組んでいきたい。		

評価項目 【テーマ】	保護者との連携 【学校運営についての保護者（P T A）との協力状況】	自己評価	A
目標	P T Aと協力した学校行事の運営／教育内容に関する保護者との意見交換		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	●全校行事のサポートとして例年、文化祭で地区ごとに分かれて中学部グッズや飲食物等の販売、中庭喫茶の運営を行い、体育大会、マラソン大会ではスポーツドリンクの差し入れを行っている。その他にも、「P T A聖書を学ぶ会」、「P T Aだより」の活動を展開している。しかし、コロナ禍にあり、こうした従来通りの活動は行えなかった。昨年度、文化祭での販売が実施できなかった経験をふまえ、運営方法を変更し、文化祭で中学部グッズや飲食物等の販売を行った。 ●P T A幹事会を例年通り年5回（1学期2回、2学期2回、3学期1回）行う予定であったが、兵庫県に緊急事態宣言が発令されたため、1学期と2学期前半は幹事会を実施することができなかった。しかし常任幹事会（P T A五役と各地区地区長で構成）はZ o o mで会議を実施し、その内容を地区幹事（クラス幹事兼ねる）に連絡し、昨年度は実施できなかった文化祭でのP T A販売を実施することができた。 ●保護者アンケート問 19「中学部は、行事などの際に、適宜P T Aと協力してこれを実施している。」ならびに保護者アンケート問 20「中学部は、P T A幹事会等、P T Aとの協議会を適切に開催している。」に対して肯定的評価が問 19 は88.2%、問 20 は90.0%（昨年度、両質問項目なし）と高い値を示しているものの、一昨年度に比べると値は低くなっている（一昨年度、問 19 は97.1%、問 20 は97.6%）。コロナ禍であり、従来通りの運営にとらわれない柔軟な活動の展開と、適切な情報の発信により、多くの方の理解を得る努力が必要である。		
今後の方策	●コロナ禍が続く中で、対面で会議が開催できない場合、常任幹事会だけではなく、幹事会もオンラインを活用して会議などを実施し、P T Aと協力した学校行事の運営の新しい形を構築していく。		

評価項目 【テーマ】	保護者との連携 【保護者との懇談の実施やP T Aとの協議会の運営状況】	自己評価	A
目標	P T A幹事会等の適切な開催／クラス担任と保護者との面談の実施／クラス・クラブ・委員会等の保護者との懇談の実施		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	●クラス担任と保護者の会（クラス集会）を行っている。 ●クラス担任と保護者の二者面談を行っている。 ●保護者アンケート問 21「中学部は、クラス担任と保護者との面談を必要に応じて適切に行っている。」に対して肯定的評価が83.2%となっている（昨年度69.9%）。昨年度にくらべると、クラス担任と保護者の会（クラス集会）や保護者との二者面談の実施ができたことがその背景にあると考えられる。		
今後の方策	●対面での面談だけではなく、オンラインを活用するなど様々な方法を考える。 ●保護者アンケートを各学期実施するなど、保護者と教員の連携を強化する。		

評価項目 【テーマ】	キリスト教主義教育の実践 【キリスト教主義教育の理念の共有】	自己評価	A
目標	教員間でのキリスト教主義教育の理念の共有		

具体的な取組の状況とその効果に対する評価	●礼拝や聖書科授業、様々な行事を通してキリスト教主義教育のプログラムを展開し、その理念を生徒・保護者・教員が共有できるように機会を設けている。礼拝についてはオンラインによるリモートでの礼拝の形も定着した。「オンライン礼拝」はオンデマンドとして繰り返し視聴することが可能となり、学校で対面で行う礼拝とは違う新しい礼拝の形の1つとなりつつある。保護者に対する「PTA聖書を学ぶ会」は1学期はZ o o mを利用してのリモートで開催したが、この形ならば参加しやすいという保護者の声も聞いている。2学期以降は対面での形を再開し、保護者がキリスト教主義教育の理念に接する機会となっている。 ●生徒アンケート問18「日々の学校生活からキリスト教の精神が伝わってくる。」の項目についての肯定的評価は87.1%（昨年度85.7%、一昨年度82.8%）、また問19「キリスト教に関する理解が深まっている。」の項目についての肯定的評価は82.4%（昨年度80.8%、一昨年度78.8%）といずれも過去3年間で毎年高くなる傾向が続いていることは評価できる。保護者アンケート問22「中学部は、キリスト教主義教育を適切に行っている。」の項目についての肯定的評価は95.9%（昨年度96.0%、一昨年度96.9%）で、昨年度と同様に非常に高い評価となっている。コロナ禍の中にありながら、生徒や保護者のキリスト教主義教育への理解の肯定的評価が継続的に高い数値である。教員アンケート問25「教員間でキリスト教主義教育の理念を共有している。」に対する肯定的評価が73.5%（昨年度82.4%、一昨年度63.6%）と飛躍的に高かった昨年度よりは低くなった。
今後の方策	●創立132年を迎えた中学部として、受け継がれてきた建学の精神であるキリスト教の精神を守り継ぐために、これからの時代に適応したキリスト教主義教育のあり方を検証し、オンラインでの方法を含め、具体的でかつ新しい教育プログラムを展開する。 ●教員に対して、礼拝の機会だけでなく、理念を共有するための研修を実施する。また、関西学院のキリスト教主義教育にかかわる行事等への積極的な参加を呼びかける。

評価項目 【テーマ】	キリスト教主義教育の実践 【キリスト教主義教育の推進】	自己評価	A
目標	学校の重要な柱としての礼拝の遵守／生徒のキリスト教的人間理解を育成するためのプログラムの実施		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	●キリスト教主義教育の実践として、毎日の礼拝の時間を中心として、生徒と教員がキリスト教精神にふれるプログラムを実施している。 ●週に2度、全校礼拝を実施することができた。ただし、讃美歌は歌唱できないため、録音された曲を聴き、これまで歌ったことのない讃美歌にふれる機会となった。2学年合同や学年、クラスでの礼拝、または放送礼拝等に形を変えて、礼拝を行い、礼拝のあり方を考える機会にもなった。また、生徒たちが自主的に取り組む生徒礼拝も毎月行い、毎週1回の早天礼拝も定着して行われている。 ●教員アンケート問26「中学部は、礼拝を重要な柱として守っている。」の肯定的評価は82.4%（昨年度97.0%、一昨年度84.8%）と昨年度より低くなり、2年前までの数値に戻ったが、中学部のキリスト教主義教育における礼拝が重要な柱として受け止められていることは明白である。教員アンケート問27「中学部は、生徒のキリスト教主義による人間理解を育成するためのプログラムを適切に実施している。」の肯定的評価は82.3%（昨年度76.5%、一昨年度78.8%）とここ数年で最高の値となった。		

今後の方策	●礼拝での奨励や聖書科授業でのカリキュラムを通して、いのち、人権、平和、道徳教育などのさまざまなテーマを取り上げキリスト教主義教育を推進していく。 ●リモート等の方法での礼拝の形を取り入れ、教員、生徒・保護者にとって親しみやすい礼拝のあり方を考えていく。 ●生徒たちの自主的な運営による礼拝がより充実していくよう、指導していく。
-------	--

評価項目 【テーマ】	特色ある教育の実践 【読書・図書館教育】	自己評価	A
目標	読書生活の推進と実態把握／図書館を活用した総合的・教科横断的な学習活動の展開／読書・図書館教育に特化した学校行事の実施		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	●設備が整った図書館を活用するだけでなく、読書記録の推奨、国語科・読書科による授業前の10分間読書の実施を通じて、読書習慣の定着を図っている。 ●読書科の授業を通じ、図書館の利用、情報の獲得・整理・活用・表現の方法や技術を学習している。 ●各省庁や法人・企業などから案内のある募集型のレポートや作文などについて読書科が窓口となり、広く生徒に情報を伝達し、文芸コンクールを実施している。各コンクールに応募した生徒の中から今年度も複数の受賞者を輩出している。 ●生徒アンケート問20「学校生活を通じて読書に親しみ、図書館をよく利用している。」の生徒の肯定的評価が75.0%（昨年度75.1%）となり、昨年度の高い評価を維持することができた。コロナ禍で図書館内での生徒たちの活動が制限されるなかでも、読書科だけでなく複数の教科で図書館を利用した授業を展開したこと、4月より電子図書館を導入するなどして様々な形で図書館利用の推奨に力を入れたことが影響したと考えられる。 ●生徒アンケート問21「読書に関するプログラムが充実している。」の肯定的評価は92.8%、保護者アンケート問24「中学部は、図書館を活用した総合的な学習やプログラムを展開している。」の肯定的評価は88.5%となり、図書館利用の取組が生徒・保護者双方から高い評価を受けた。		
今後の方策	●次年度もコロナ禍によって様々な影響があることが予想されるが、そのような中でも、本校の伝統的な読書科教育の根幹を変えず、生徒に対するアプローチを継続していく。		

評価項目 【テーマ】	特色ある教育の実践 【芸術教育】	自己評価	A
目標	音楽・美術を中心とした芸術教育による児童生徒の豊かな感性の育成／音楽・美術を中心とした芸術教育による児童生徒の自己表現能力の育成		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	●通常の音楽・美術の授業に加えて、秋に行われる文化祭では、各クラスが合唱を披露する音楽コンクール、授業で制作した全校生徒の作品を展示する美術展などを開催している。 ●生徒が本物の芸術に触れることができる機会をつくるために、学外の施設に演奏や劇を鑑賞しに行く、演奏家や楽団などに学校公演を依頼するなどして、芸術鑑賞会を毎年おこなっている。 ●生徒アンケート問24「音楽・美術などの芸術活動を通して、表現する楽しさを味わい、豊かな心が育っている。」の肯定的評価は75.9%（昨年度77.0%）、保護者アンケート問27「中学部は、音楽・美術を中心とした芸術教育により、生徒の感性と表現力を育成している。」の肯定的評価は78.4%（昨年度78.0%）となり、どちらも昨年度とほぼ同程度の評価となった。昨年度と比べると授業や行		

	事などでの活動制限が緩和されたものの、例年どおりの教育活動、表現活動はおこなうことができていない。そのような中でも各教科、行事担当者、担任の創意工夫で、生徒が表現・鑑賞活動をおこなう機会を確保したことが今年度の評価につながったと考えられる。
今後の方策	●次年度も新型コロナウイルス感染予防策をしっかりとしながら、可能なかぎりこれまでの活動を続け、生徒の表現や鑑賞活動の場を少しでも多く設けることを目指す。

評価項目 【テーマ】	特色ある教育の実践 【キャンプ・体験的学習】	自己評価	A
目標	キャンプ・体験的学習の、教員全員・学校全体による実施		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	●キャンプ・体験的学習は中学部が長年大切にしてきた伝統的行事の1つである。1年生時は入学直後の千刈オリエンテーションキャンプ（2泊3日）、2年生時は岡山県の無人島でのキャンプ（4泊5日）、3年生時は修学旅行（4泊5日）と、各学年で特徴的な校外宿泊行事を設けている。しかし、今年度はコロナ禍のため、宿泊を伴う行事の実施形態の変更を余儀なくされた。 ●1年生時の飛鳥での校外学習、2年生時の奈良での校外学習、3年生時の修学旅行では、事前に生徒に行動計画を練らせ、班行動を中心とした自主研修を組み入れている。 ●今年度は1年生のオリエンテーションキャンプは学校内での3日間のプログラム、2年生のキャンプも日帰りキャンプとなり、どちらも宿泊を伴わないキャンプをおこなった。3年生の修学旅行も通常の4泊5日から2泊3日に短縮し、兵庫県内での修学旅行となった。どの学年も例年とは異なる形のプログラムであったが、生徒アンケート問26「キャンプや体験的学習が学校全体で丁寧に準備され実施されている。」の肯定的評価は85.3%となり、高い評価を得た。これは、コロナ禍によって昨年実施することができなかったキャンプ・宿泊行事を形態を変更しておこなったことを、生徒が高く評価したことによると考えられる。 ●教員アンケート問32「中学部は、キャンプ・体験的学習により、生徒の創意工夫や協力する心を養っている。」の肯定的評価は85.3%となり、2019年度と比べると評価が下がっている（2019年度100%、2020年度はキャンプが実施できなかったため質問項目なし）。保護者アンケート問29「中学部は、キャンプや体験的学習を丁寧に準備・実施している。」の肯定的評価は72.9%で、前述の生徒アンケート問26の肯定的評価（85.3%）よりも低かった。コロナ禍のために各学年のキャンプ、宿泊行事が例年よりも大きく形が変わったこと、縮小されたことが影響していると考えられる。		
今後の方策	●キャンプ・体験的学習の意義は、生徒・保護者・教員の誰もが認めるところである。次年度もコロナ禍の影響により様々な変更が余儀なくされるであろうが、新型コロナウイルス感染予防策、体調管理等の安全対策をこれまで以上に検討し、キャンプ・体験学習の実施を継続していく。		

評価項目 【テーマ】	関西学院共通項目 【関西学院における一貫教育を含めた総合学院としての観点】	自己評価	A+
目標	スクールモットー“Mastery for Service”の認知度・共感度を知る。／スクールモットー“Mastery for Service”の認知度向上を図る。／学校の教育が、関西学		

	院の使命である「“Mastery for Service” を体現する世界市民」の育成につながっていることを再認識してもらう。
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	●一昨年度、昨年度に引き続き、関西学院の建学の精神を表すスクールモットー“Mastery for Service” の理念の共有と実践について、生徒・保護者・教員に対して共通の質問を提示し、回答を得た。生徒アンケート問 28、保護者アンケート問 31、教員アンケート問 34 の「私は、関西学院のスクールモットーが“Mastery for Service” であることを知っている。」の肯定的評価は、生徒が 98.1% (昨年度 98.0%、一昨年度 98.9%)、保護者が 98.5% (昨年度 97.2%、一昨年度 98.4%)、教員が 100% (昨年度 100%、一昨年度 100%) という高い数値を維持した。特に保護者の数値が高いことが本校の特色である。スクールモットー“Mastery for Service” が生徒・保護者・教員の共通の理念となっている。生徒アンケート問 29、保護者アンケート問 32、教員アンケート問 35 の「私は、関西学院のスクールモットー“Mastery for Service” に共感している。」の肯定的評価も、生徒は 90.7% (昨年度 91.7%、一昨年度 90.5%)、保護者は 97.8% (昨年度 97.3%、一昨年度 96.4%) と高い数値を維持し、教員は 97.0% (昨年度 100%、一昨年度 100%) であった。生徒アンケート問 30、保護者アンケート問 33、教員アンケート問 36 の「中学部は、『“Mastery for Service” を体現する世界市民』の育成につながる教育を実践している。」の肯定的評価は、生徒が 85.3% (昨年度 84.0%、一昨年度 84.4%)、保護者が 86.9% (昨年度 88.9%、一昨年度 89.4%)、教員が 81.8% (昨年度 91.2%、一昨年度 93.9%) という高い数値が継続的に出ている中で、教員が昨年度より 9.4 ポイント低くなっている。中学部がスクールモットーを基に教育活動を展開していることを、生徒・保護者・教員が共通に理解し、その実践を心がけていることがうかがわれる。
今後の方策	●スクールモットー“Mastery for Service” の理念の共有と実践についての肯定的評価はすでに高いが、より具体的にその理念を教育活動で展開できるかを考え、授業や行事等において展開する。

評価項目 【テーマ】	その他 【コロナ禍への対応】	自己評価	B
目標	コロナ禍への適切な対応		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	●感染状況が悪化したときは常に教務部から教員にオンライン授業への意識を喚起し、いつでも対応できるように備えた。 ●行事に関しては、コロナ禍にあっても、できるだけ生徒・保護者のニーズに応えようとした。官公庁からの指針に沿って変形的な実施とはなったが、最終学年の3年生は行事のほとんどを挙行了。また、本校の特色的な行事である宿泊を伴う無人島キャンプは、今年度も行えなかったが、キャンプ地だけでも知っておき、精神的な伝統の火を消さぬよう、当該学年の2年生と昨年度2年生である3年生が日帰りではあるが無人島に上陸するプログラムを行った。 ●生徒アンケート問 31「コロナ禍の中でも（休校期間中含む）、学習に十分取り組めた。」の肯定的評価が昨年度の 57.9% から 68.0% に上がっているのは、授業だけでなく、上記のような課外活動面が昨年より展開できたことも学習意欲に影響していると考えられる。 ●また、コロナ禍への対応について、保護者アンケート問 34「コロナ禍についての学校の対応は総じて適切であった。」の肯定的評価は 83.4% (昨年度 83.7%) で、昨年度とほとんど変化はない。コロナ禍が2年目に入り、色々な面で学校に		

	進展はあるものの、まだ万全には遠いという評価の表れではないかと考えられる。
今後の方策	●行事に関しては、校外行事、宿泊行事挙行への更なる模索を行う。 ●上記とは逆に、これまで校外で行っていた行事を校内で行うにはどうすればいいかの研究もすすめる。 ●オンライン授業の有無にかかわらず、教員のICTに関するスキルを上げる。

(自己評価)

A+=テーマに対する目標を達成した。

A=テーマに対する目標を概ね達成した。

B=テーマに対する目標の達成に向けた計画や方策などを実行しているが、達成にはまだ時間がかかる。

C=テーマに対する目標の達成に向けた計画や方策などを実行していない。

総合評価

- 全体的にみて、生徒・保護者・教職員が総力をあげて2年目のコロナ禍の教育活動に取り組んだ様子がうかがえる評価結果となった。概ね高い数値で肯定的な評価が与えられた一方、強い肯定（強くそう思う）に注目すると、2年目ならば改善できたであろう余地が見てとれる。
- すなわち、生徒への（昨年比が可能な）29問中、強い肯定の割合が昨年のそれを超えたものは9項目（31.0%）、同じく保護者では30問中23項目（76.6%）、教員では33問中5項目（15.1%）だった。3分の2が同一構成員である生徒からの上記数値（31.0%）は、さらに適切な対応（教育活動）があり得た可能性を示している。教員による厳しい自己評価（15.1%）とともに真摯に受け止めつつ、引き続くコロナ禍にあって、各項目に記されている今後の対策に尽力したい。
- 7割を超える保護者からのアンケート回収率は決して低くはないものの昨年比でやや低下した。学校から家庭への連絡をこれからも丁寧におこない、保護者から寄せられる関心を学校が十分に受け取ることができる下地をさらに整えていきたい。
- キリスト教主義に基づく人間教育。様々な体験を通じて心と体と頭をバランスよく養い鍛える全人教育。これら本校のミッションにかけられる期待が改めて浮き彫りになる評価結果でもあった。今できることを不断に求め、かつ実行していき、これらのミッションを未来につなげる中学部でありたいと願う。
- そのためにも、スクールモットー“Mastery for Service”が教員間でさらに浸透するよう図っていきながら、そのモットーを体現する世界市民の育成を目指す意識を教員間で共有していきたい。

2021年度の評価をふまえて2022年度に予定している評価項目、テーマ等

- 評価項目については、①教育課程・学習指導、②生徒指導、③保健管理、④保護者との連携、⑤キリスト教主義教育の実践、⑥特色ある教育の実践、⑦関西学院共通項目⑧その他の8項目を継続して取り上げる。

第三者評価／学校関係者評価

昨年度に引き続き、コロナ禍への対応を求められる一年でした。様々な情報が入り乱れ、地域の感染者数も乱高下する中、学校の安全性のために緊張感を持続しながら、しかし対面でこそ叶えられる学びの機会を提供する——このかじ取りには、昨年度以上の難しさがあったでしょう。教員アンケートにも「もっとできたかもしれない」という思いが滲んでいます。しかし、生徒と保護者のアンケート結果に表れているように、教職員は最善の努力を尽くしたといってよいでしょう。それと同時に、コロナ禍以前から取り組まれてきた改善の努力も、実りを見せた一年でした。BYODの全面実施の基礎となる教員のICTの熟練度も上がり、情報共有フォルダーも生徒指導に有効に活用されているようです。困難な状況にもかかわらず、学校の改善が継続的・安定的に行われていることを高く評

価します。以下、主要な点についてコメントします。

＜教育課程・学習指導＞

- 生徒の評価がおおむね高いこともあり、全体として高く評価します。BYODの実施学年が増え、授業スタイルの更新が今後も継続して求められますが、今の取組を続けていただきたいと思います。
- 授業の創意工夫に関する教員の自己評価は少し低下したようですが、授業の分かりやすさなど生徒側の評価は経年的に見て向上していますし、教員の授業づくりの努力は生徒に伝わっているようです。また学力推移調査の導入によって学力の伸長を客観視できる機会も設けられました。
- それにもかかわらず、生徒自身は学力の伸長を十分実感しているとはいえないようです。コロナ禍前から続く難しい課題となっています。しかし授業の難度を上げることでこの課題が克服できると考えるのは早計でしょう。たとえば中学受験を乗り越えて入学した生徒の学力観と、関西学院中学部で重視されている学力観の間にギャップがあるのかもしれませんが、それが「授業は充実しているが、自分の学力が伸びたようには感じない」という評価に帰結するのかもしれませんが。また学力の伸長をどの程度実感しているかと、学習到達度との相関も気になることです。高校受験や大学受験をゴールとした学力とは異なるものを育てている関西学院中学部ならではの課題なのかもしれません。上記のギャップなどを含め、生徒たちの学力「観」の実態を把握しながら、関西学院中学部で育まれている学力観の理解が共有され深まっていくことを期待します。
- なお、学習到達度の低い生徒への対応として、大学生による定期的な補習制度を検討しているのですが、生徒にとってはもちろん、教職志望の大学生の指導力向上や教員の負担軽減という観点からも有益な制度です。早く導入されることを期待します。

＜生徒指導＞＜保健管理＞＜保護者との連携＞

- 上述の情報共有フォルダーもそうですが、きめ細やかな生徒指導体制がその成果を見せつつあること、高く評価します。
- 教員は「ルールやマナーへの指導」ならびに「生徒の自主自律の精神の育成」に難しさを感じているようですが、その難しさはコロナ禍に起因するところが大きいでしょう。衛生的な必要に迫られ、ルールやマナーも急増し、それを指導せねばならない場面が増える一方、人的交流も制限される中、自主自律の精神が育つ機会の確保が困難だった——困難な状況にあって、生徒の安全の確保に全力が傾けられました。
- 従来であれば、気軽に心や体の相談のできる場所として「開かれた保健室」の役割が重視されていましたが、コロナ禍においてそれも難しくなったところがあります。生徒の相談の場・役割について、改めて検討する必要があるのかもしれません。
- 生徒の自治活動とPTA活動の重要性を意識し、その実施のために努力したことを高く評価します。既存のルールが通用せず、新たなルールやマナーに翻弄されながら、しかし未来は見通せない今だからこそ、自主自律の精神の重視し、それが育まれる機会の確保に努められたと理解しています。その努力を継続し、生徒と保護者の自主性を尊重し、生徒や保護者の声をしっかりと受け止めることを期待します。

＜キリスト教主義教育の実践＞＜特色ある教育の実践＞＜その他＞

- 昨年に引き続き、キリスト教主義教育という根幹に繰り返し立ち返ることでコロナ禍を乗り越えてこられたことを高く評価します。また関西学院中学部の特色ある教育は、コロナ禍との折り合いが難しいものが多いですが、安全面に配慮しながら可能な限りの実践に努めました。今後も新型コロナウイルスとの共存が続くのか見通し難いですが、非常事態から日常を取り戻すときにこそ、新たな風が吹き込むものです。関西学院中学部の飛翔につながることを願っています。

＜教育課程についての共通理解と連携＞

- 教員アンケート問1「教員は、教育課程の全体を理解している。」の項目についての肯定的評価が、88.2%（昨年度）から82.4%（今年度）へ低下しています。「高い数値を維持している。」としていますが、5.8ポイント下がっていることの原因は考察に値するのではないのでしょうか。

＜各教科の特性に応じた授業の工夫＞

- 生徒は概ね授業をわかりやすいと感じています。教員が日ごろから教材研究や生徒の学力把握に努力していることがわかります。

＜個々のニーズや興味・関心に応じた授業展開＞

- 数学、英語で到達度の低い生徒に対して補習を行っていますが、その結果、到達度が高くなっているか、また、それはどの程度なのかを検証する必要があります。

＜基本的生活習慣の確立＞

- 基本的社会マナーについての項目で、生徒・保護者と教員の間で肯定感に差があります。コロナ禍の影響もあると思いますが、これでよしとするラインで両者にギャップがあります。その差をうめるにはどうすればよいかを考察する必要があります。

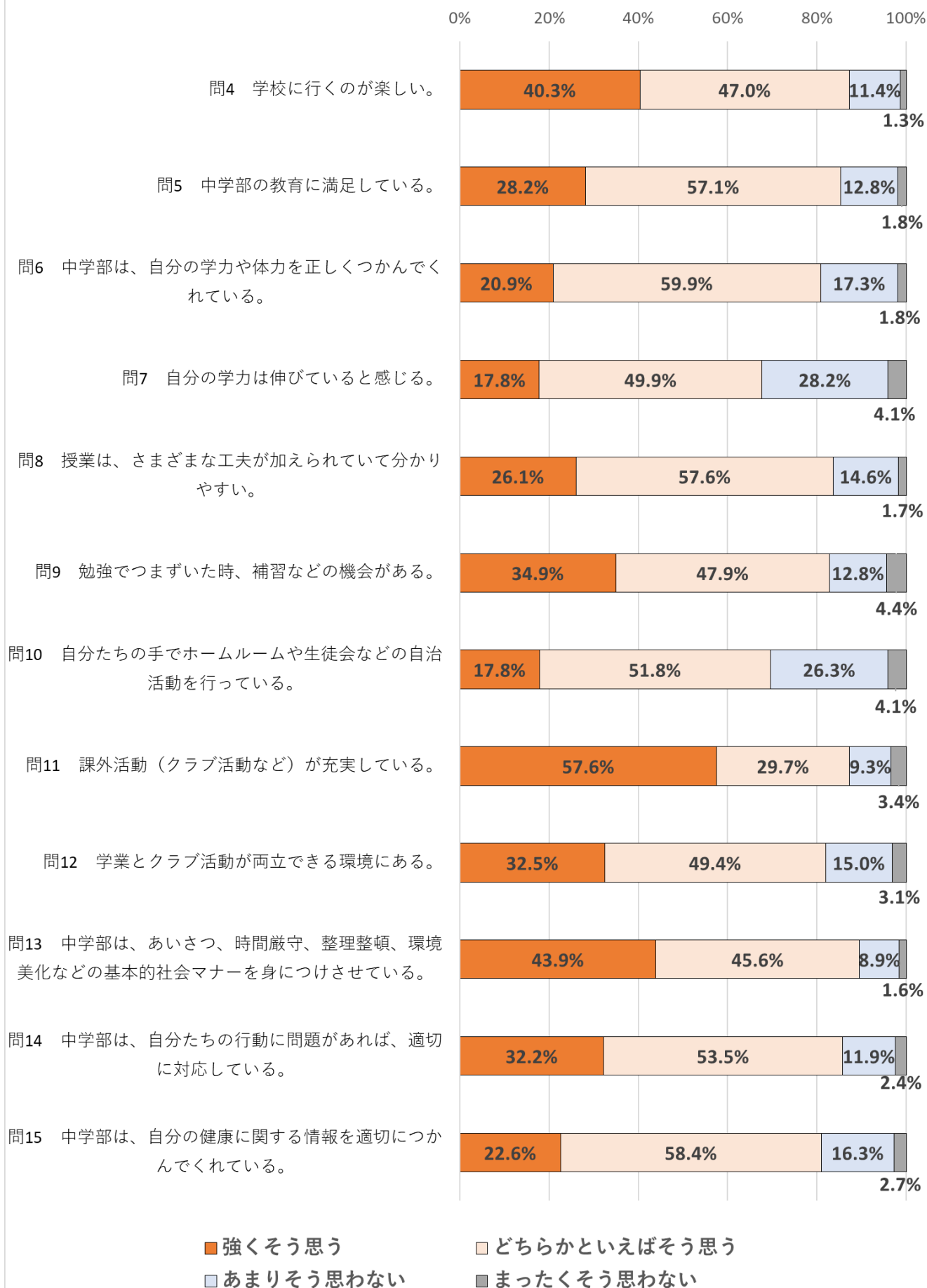
＜関西学院における一貫教育を含めた総合学院としての観点＞

- 「スクールモットーが“Mastery for Service”であることを知っている。」の肯定的評価が、生徒・保護者ともに高い数値であることは理解できます。しかし、視点を変えると知らない生徒・保護者がごく少数ですが存在しています。また、共感しているかの質問の回答も同様な結果が出ています。本来、中学部（初等部も含め）を受験する際に“Mastery for Service”がスクールモットーであることはわかっているはずで、共感しているからこそ入学を希望しているはずです。なぜ、100%ではないのかを深掘りする必要があります。

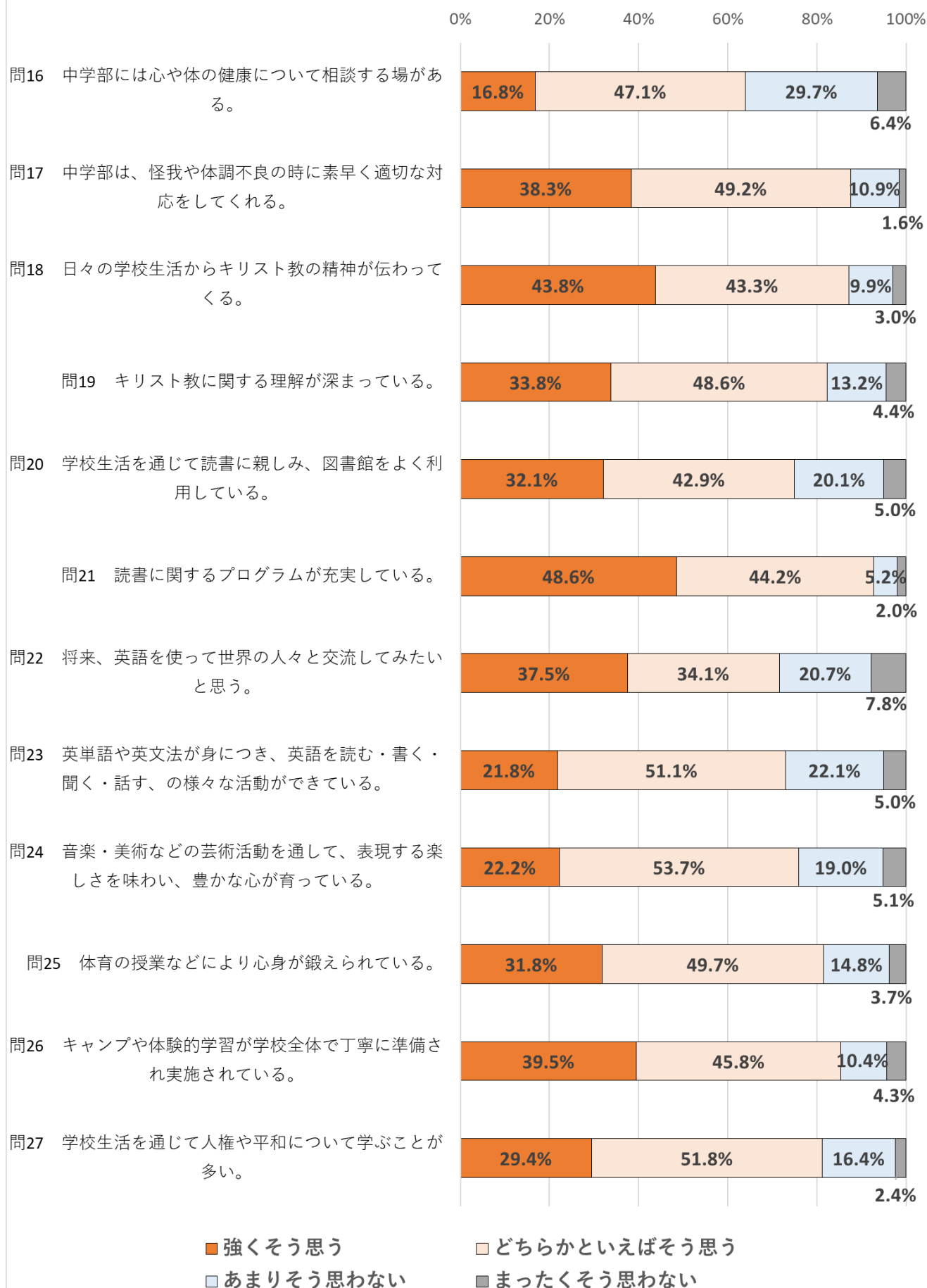
＜総合＞

- 新型コロナウイルス感染症が流行して、2年が過ぎようとしています。このような先が見えない不安の中で、中学部の教員が、なんとか創意工夫を積み重ねて、学校の教育活動を維持してこられたことには頭が下がる思いです。生徒・保護者の大半が中学部の教育について、肯定的意見であるのは、その成果だと考えます。次年度もコロナ禍は続くと言想される中、中学部がさらなる創意工夫を重ね、進化していくことを期待しています。

2021年度 学校評価アンケート集計結果
中学部・生徒 （回収率 97.3% 718人/738人中 ※有効回答数710人）

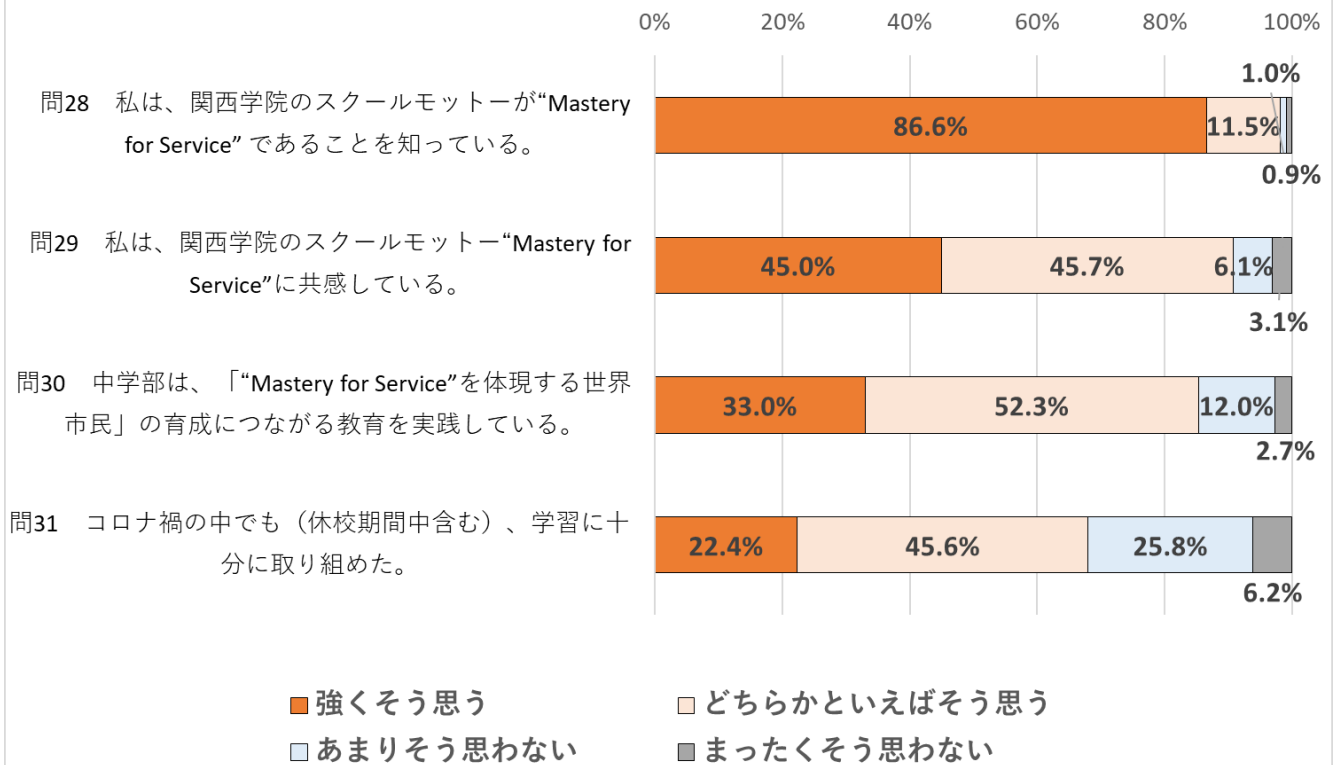


2021年度 学校評価アンケート集計結果
中学部・生徒 （回収率 97.3% 718人/738人中 ※有効回答数710人）

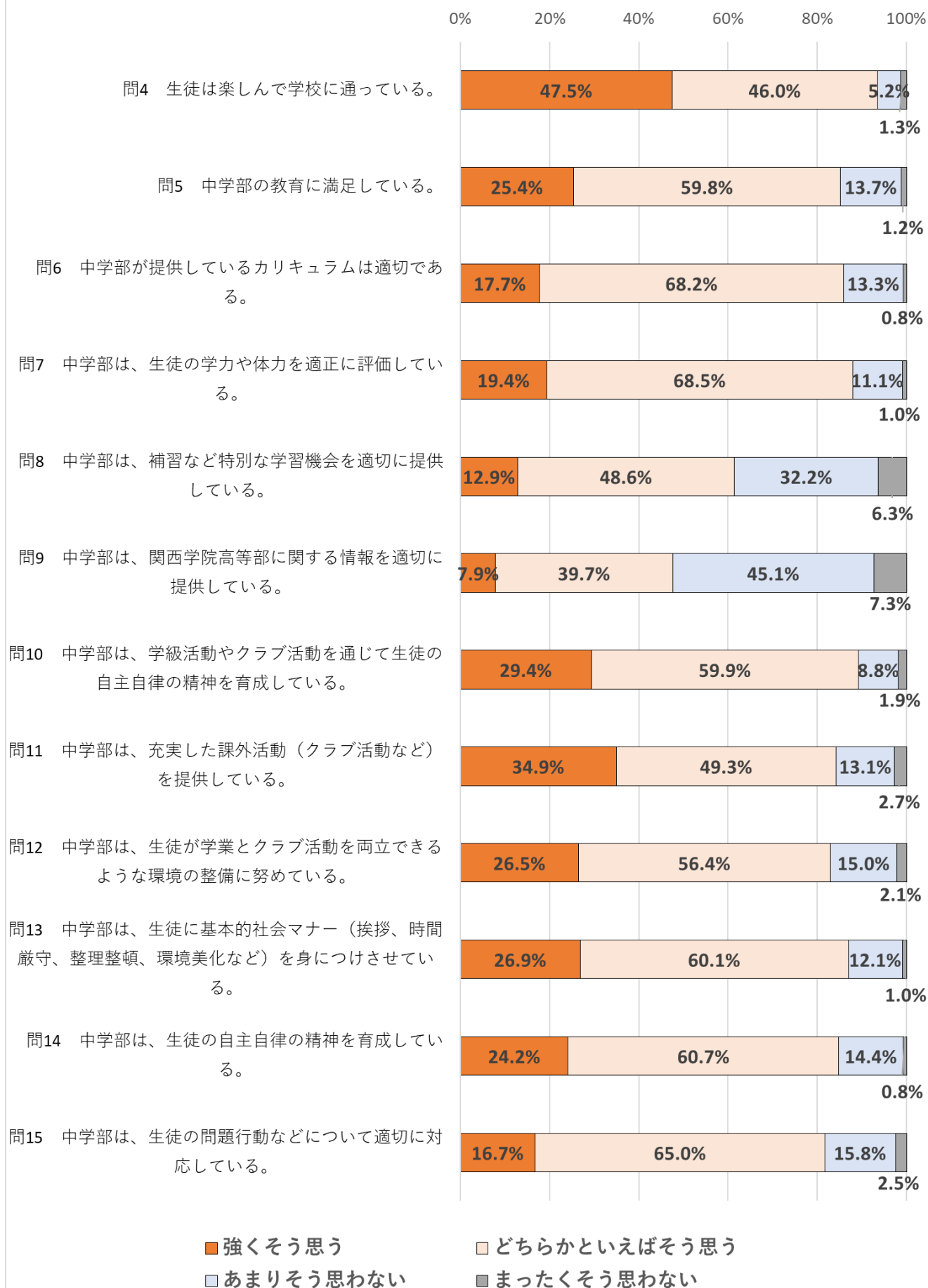


2021年度 学校評価アンケート集計結果

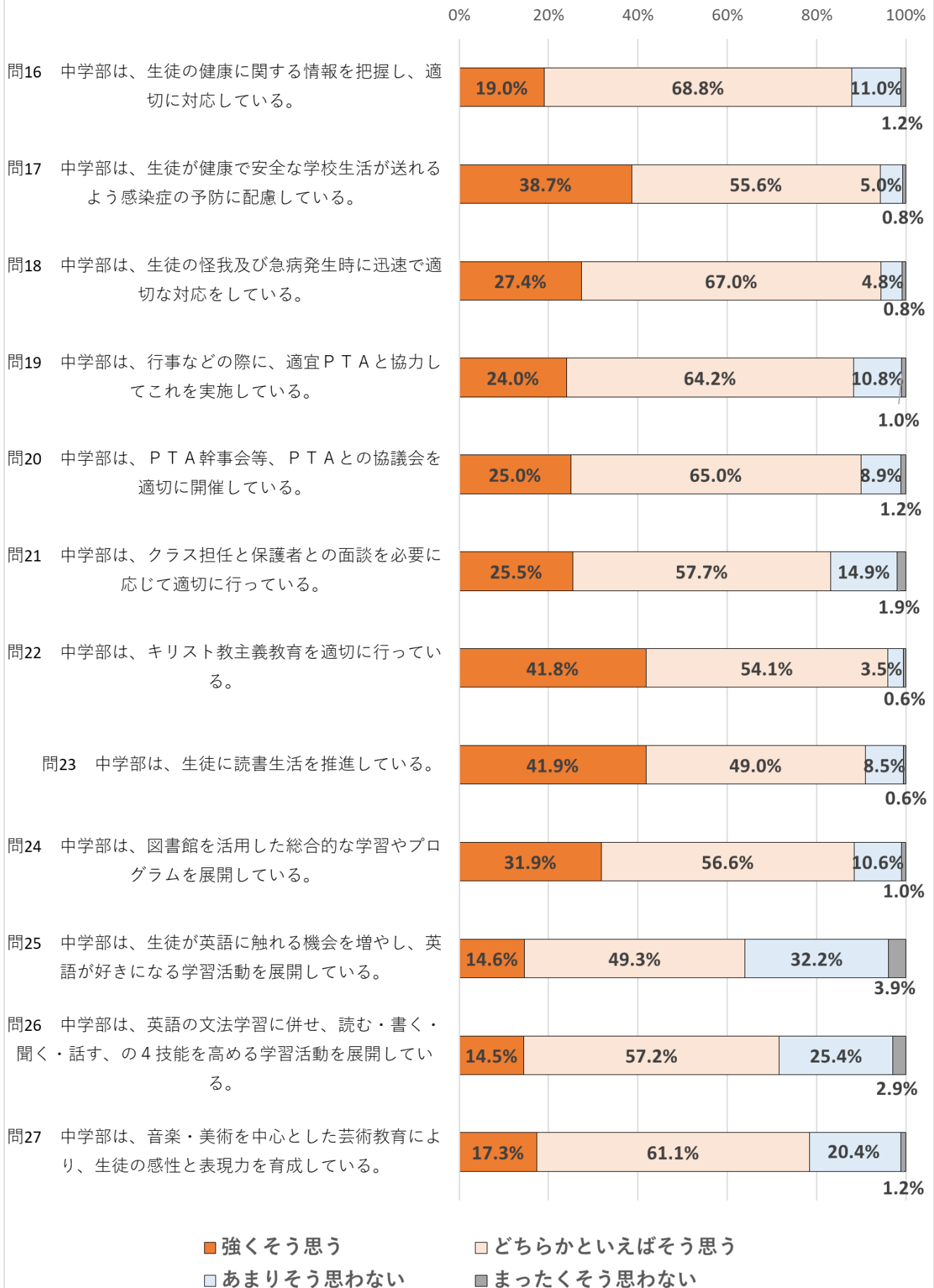
中学部・生徒 （回収率 97.3% 718人/738人中 ※有効回答数710人）



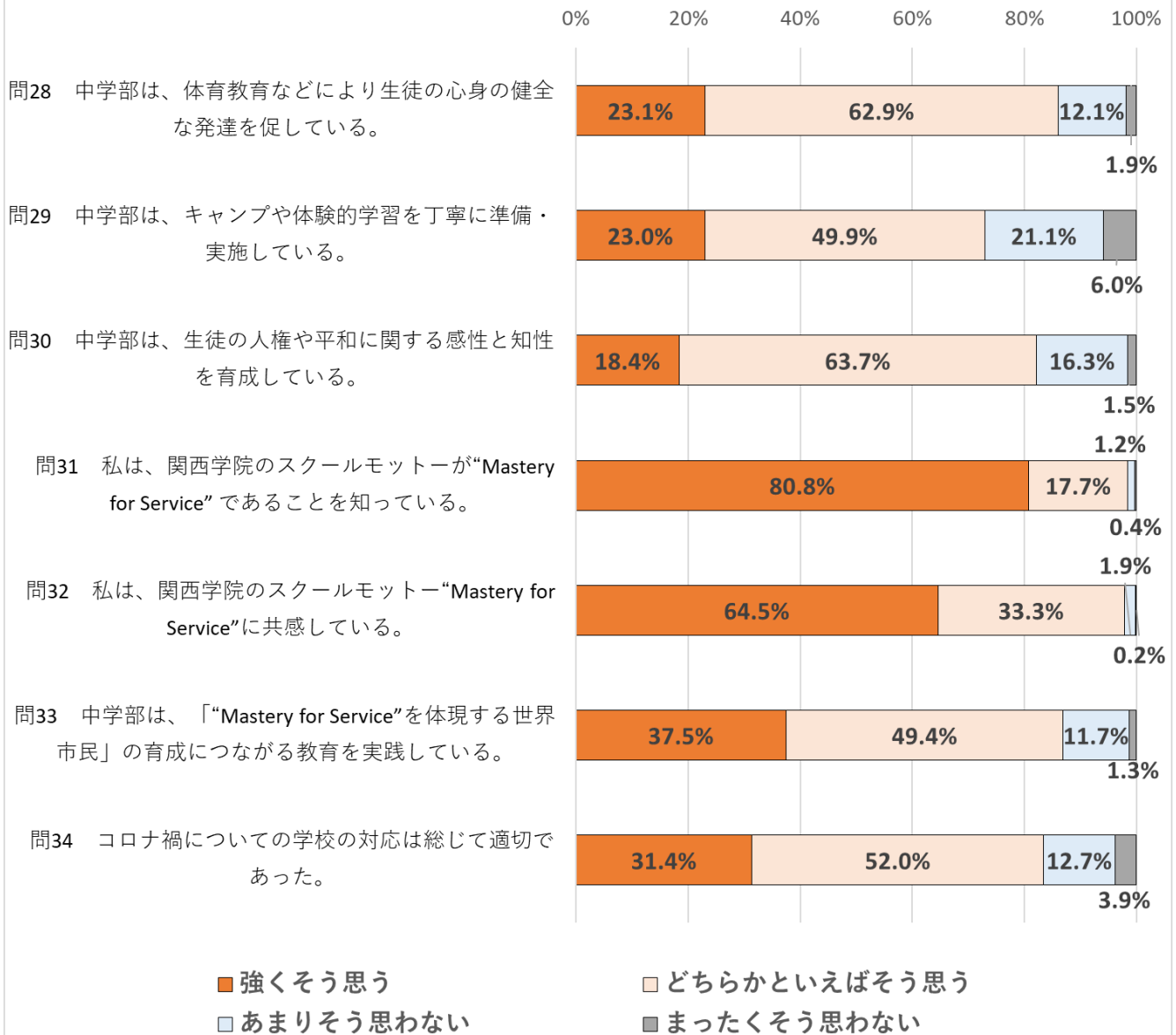
2021年度 学校評価アンケート集計結果
中学部・保護者（回収率 70.6% 521人/738人中）



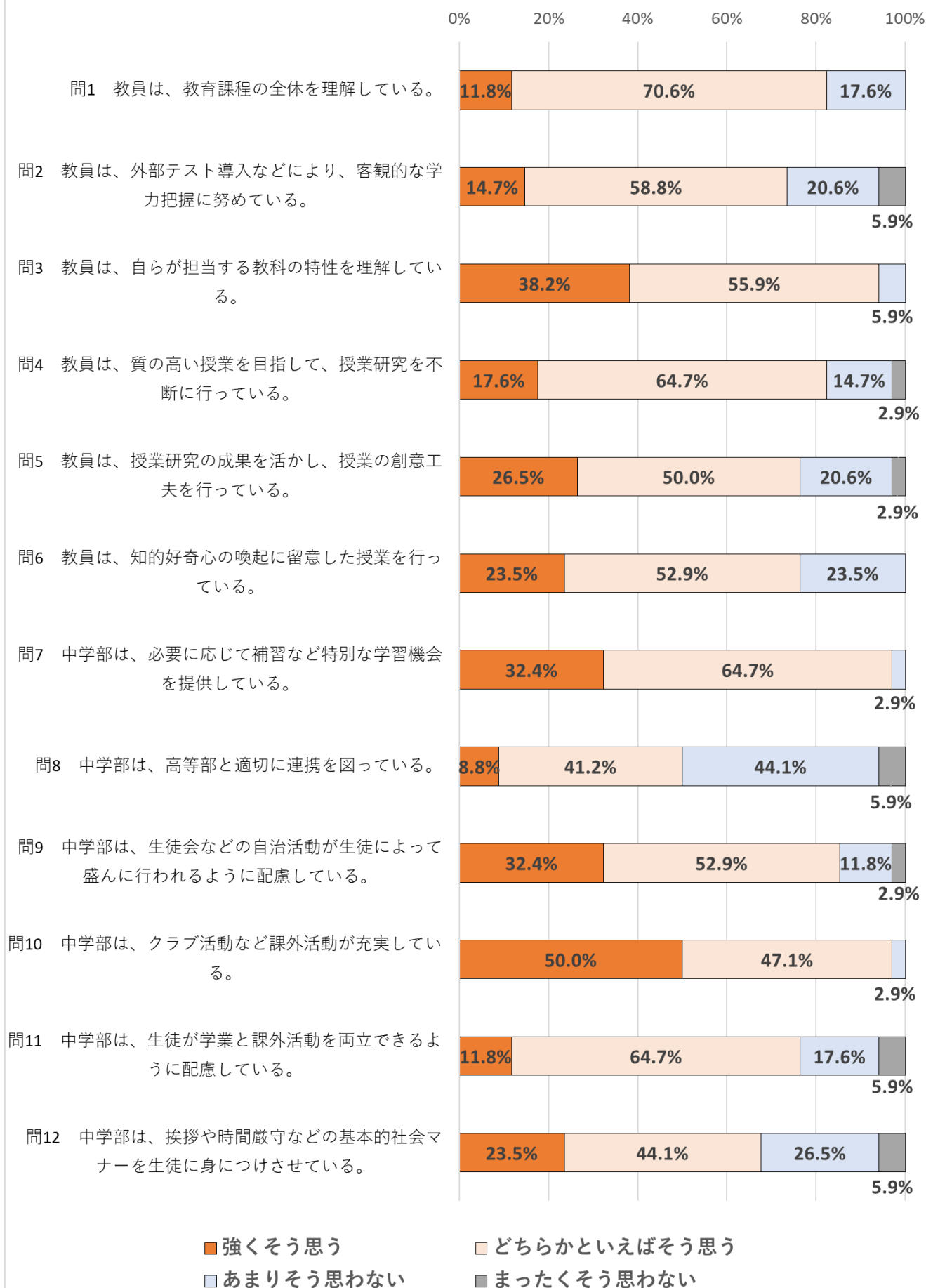
2021年度 学校評価アンケート集計結果
中学部・保護者 （回収率 70.6% 521人/738人中）



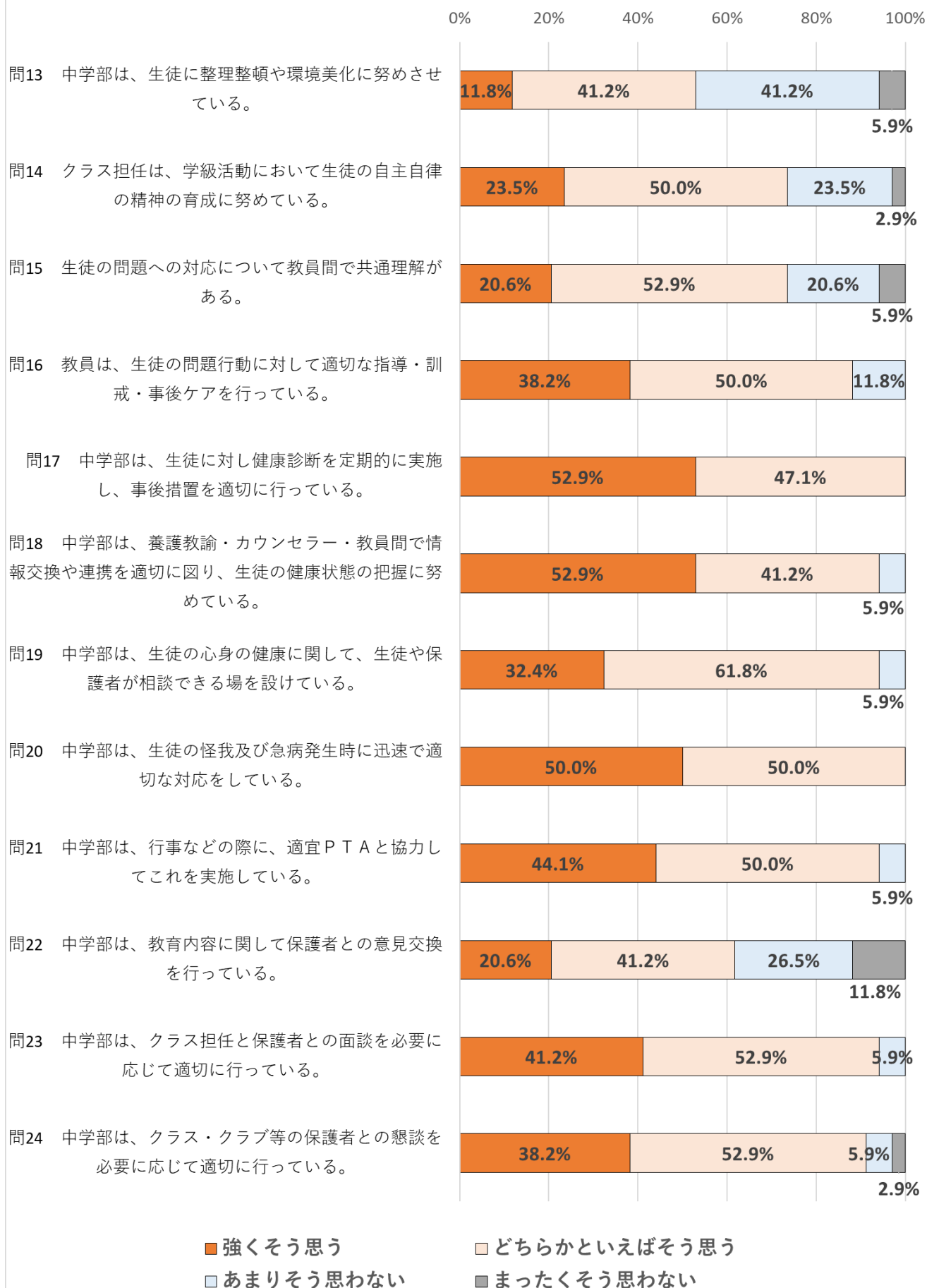
2021年度 学校評価アンケート集計結果
中学部・保護者 （回収率 70.6% 521人/738人中）



2021年度 学校評価アンケート集計結果
中学部・教員 (回収率 100% 34人/34人中)



2021年度 学校評価アンケート集計結果
中学部・教員 (回収率 100% 34人/34人中)



2021年度 学校評価アンケート集計結果
中学部・教員 (回収率 100% 34人/34人中)

